詩　人　学　校

№３６９

１９８１年４月

滋賀県甲賀郡甲西町善提寺　鈴木寅蔵方　近江詩人会

とこしえの命

田　中　克　己

立原道造は若くして死に
蔵原伸二郎は老いて死んだ
丸山薫・田中冬二は八十歳を越えて死んだ
わたしは七十歳になろうとし
十人の孫を残して去るだろうが
とこしえの命を信じている。

切り捨てられていくもの

松　村　美　代　子

病室に尿の臭が沁み
二人の老婆がうすい身を
横たえている
ひとりのそばに
血の気の薄そうな若い女が
さっきから　坐っている
ひとりの寝がえりをうつ気配が
わたしの背にはりつく

老婆はたしかに沈んでいる
明るい陽射しの中で
浮上するものと　沈んでいるものとは
なにかを暗示するようだ

夕食を知らせる看護婦に
二人の老婆が首をふり
「食べないそうで」と
はじめて若い女が
声をだして笑った
しつこく笑った

それっきり
夕食は運ばれなかった

かげろい

津　守　建　治

廻る花車はときのかげろいをうつし
おもむろに長い道のりをゆく
日輪かたむき　ふと
わたしは午睡の夢から醒める
すると流れ入る光が
わたしの物思いを寸断する
日々を追わなくなってすでに久しく
日々はわたしのあとを追いかける

この春に寄せて

なにがなく歩み出せば
色合いを変えて春は身にしむ
「ゆこう」とひとこと呟けば
列車はおもむろにすべり出す
けれども追憶の闇は喪服を着て佇み
沈黙は海の底ふかく沈みゆく
背後の影の伸びゆく先を知らぬまま
愁いの眼差しははるかな出発をこの春に告げ
る

詩　人　学　校

№３７６

１９８１年１１月

滋賀県甲賀郡甲西町善提寺　鈴木寅蔵方　近江詩人会

闇（4）

水　沼　靖　夫

受精後2ケ月末までの細胞を胎芽という。形は明らかでないが、やっと人間を感じさせる。

存在を消すのなら、この間がいい。芽を摘むように、後の形の不明なものは、消えて残るものもない。

—やみのこのみや—

つくられつつあるものは、たやすくくずれる。脳や骨のような、生を支えるものは、まだできていない。

運命のような種が明らかになる前に。部分がその役目を知る前に、消してやる。

「め………の受難」

吉　本　与　梨　子

仔細に　好奇心の五階の下宿人のめ
闖入者の毛のあらい吠えたてる犬のせわしいめ
きなくさいひびわれたあとからあとから焼け落ちる気短かな昨日の夜のめ
きん獣の饒舌の火のまちきれぬ静寂のめ
たましいの投げ込まれた猶予の殺戮のめ
花野菜
花野菜
と享楽に打ちわられたための洪水の
皮川河
みがきこまれたための鏡板に打ちひらかれた
運命を待たない
ポアン・ダラソンの花粉の
氷ついた眼

注．ポアン・ダラソン（レースの名前である。）

湖のうた（蜆）

鈴　木　寅　蔵

百余の川の水を湖は湛えながら瀬田川に流す
このあたり近江八景の唐橋と共に網竿で
小舟に掬い揚げる蜆漁は往時の風物となった

若い頃　牧の水泳場の茶店でさで網を借り
水底を二三歩引きずって一握の蜆が掬えた
やがて浮し桶に易く一杯、袋に詰めて帰った

今は沖の島附近、松原、湖西などの砂浜に
夏の禁漁が解けると底掻き網で多少揚がるが
寒蜆は身も肥り佃煮や味噌汁は庶民のものだ

秋の日、入院の友が点滴の永い病床の窓から
ふと蜆汁の匂がする食べて見たいと呟いた。
早速買い届けると一ケ月後に退院して来た。

かつては瀬田川の蜆は鼈甲色で一味違ったが
その蜆で青かび類を培養、ペニシリンを造成
この物質で手術を得た私の生命に関わる蜆よ

詩人学校

№414

1985年1月

彦根市本町一丁目8番27号　藤野一雄方　近江詩人会

詩人学校

田中克己

わたしは湖畔に詩人学校を作った
一緒だった小林和上が肺病で死に
多喜さんは自動車事故で行っちまった
のこる武田豊はブツブツとぼやいている
わたしは東京で湖をおもい出す
青いきれいな水だった
そこには城があり今もなお
井伊夫人が伯爵の位をもっている
もっとも彼女は和歌と文で
オキナワ（ウチナワ）の悲しみを歌っている
も一度　湖畔へもどれないか
チューリッヒの湖は遠すぎて
箱根の芦の湖も水争い
徳永夫人は転居先を教えない
わたしが初恋の人だった
それを彼女は夫に知られるのを
ひどく深刻におそれている
わたしは願う　声はりあげて
「湖女よニンフよもう一度
わたしの本だらけの室に出て来い」

離れた家

山田英子

床の間のとなり
観音開きの襖をあけると
掛軸や壺の箱と一緒に
しまわれている
わたしが生まれる前の世界
アルバムの中で
幔幕はたくしあげられ
紅白なのか
黒白なのか
青年の父が斜めにかまえ
束髪の叔母がほほえむ
若いまま逝った人たち
十八才の父の画帳には
淡く色どられた陶器の花束
パンジーの花びらは少し欠け
今も違い棚の隅に
昔むかし　ひいおじいさんが
金のキセルを黒檀の文机に打ちつけ
金粉づくりを思いたち……
真鍮から金
アルミから銀
贋金づくりのような
金粉屋のおとぎ話は
語りつがれ
二十年前のわたしの
面影を宿すといわれる姪は
わたしが使っていた
おもての二階のひと間に
今夜も　ひめやかに
恋人を招き入れる

ロメオ

田中克己

前の家では末っ子が猫好きで
日なたの縁側にはいつも六匹ほど並んでいた。
阿佐谷ではシャム猫を飼って
これも末っ子がロメオと名づけてたが
病気になり獣医にかかり三回の治療も
甲斐なくて死んでしまった
庭の隅に埋めたがそこには
今は伊豆からもって来た生薑が植わっている
ロメオはこやしになったと思う
近所にはロメオの血がかかった野良猫がいて
その中の一匹がいつも庭を横断する。
ロメオとジュリエットは結婚直後に死に
子どもなどもたなかったのに——！
（芥川比呂志君追悼）

冬の夢

篠原ゆう

うすら寒くて広いところで
見知らぬ人の手を握りしめて
泣きじゃくっている夢をみた
その男は所在なさげに茫然として
抱きしめようとはしなかったが
振り払おうともしなかった
顔だけが見えない……
植物のように痩せた男が好き
冷めたい指にしがみつくと
時間の何倍もの速さで
体が子供に戻っていった
たぶんこれが
まちがいの始まりって奴なのだろう
せつないよ　夢半分
待っても待っても終わりは来ない
季節は変わらず
カサカサの冬ばかりが
逆流している

惑う

不安なぶんだけ
自由でいると
見えないものをつかみたい
自由なぶんだけ
不安があると
見えるものまでつかめない
一番大切なはずのものを
見失ってしまったと
あとになって気づく
あとはいつか
かけがえのないものを
懐しいだけの昔に
すりかえようとして
見極めそこねた不安のかたち
掌にのせれば
守りそこねる自由の重さ

暮景

小倉幸子

頭と尾を断たれても
一メートルはあろう脂ののった奴
「これだけ大きいのは珍しおす」
立止る人々に　とりもつ遣手
「へエ　キングサーモンでっせ」
鉢巻の六十がらみが
二枚におろすとみせて　その実
ほんの二、三糎刃を進める

「詩人学校」別冊

武田　豊氏追悼号

一九八九年六月

近江詩人会

わかれのことば

田中克己

雲の降りさうな日であつたが
町には浪花節の大会があつて
近くの村から人々が集つてゐた
詩人がその接待で忙しいので
僕は町中をうろついてみた
反物屋の多い町で
そのため空とは反対に
家のなかでは色彩が美しい
さてやつと詩人にひまが出来て
でんがくを食べに案内される
酒を飲まうといつて一本つけ
彼は八杯で赤くなり僕は一杯
わかれのことばを一言だけいひたくて
眼と耳との不自由な彼に
大きな声で「恋愛の詩を書け」といひ
問ひかへされたのでくりかへす
厨で女中たちが聞いてゐる——
「奥さんのことを詩にかけ」
さういひ直したが聞えたかどうか。

（詩人学校　第十集
昭和二十六年五月二十日発行）

後生楽—武田豊のこと口

天野　忠

長浜の詩人武田豊君のことを、皆がおっちゃんと呼んでいるので、私も気軽に、おっちゃんと呼んでいる。その人を眼の前にして、おっちゃんと呼ぶのが、いかにもまったりと、当方にも身のつく感じがして、ああこの人は、ほんとうにおっちゃんだわいと思ってしまう。このごろは、お酒を三合ぐらい飲むようになりましたと、あの気立てのシャンとした、そして物柔かな奥さんが、一寸笑い顔になりそうな眼の色をして言った。

成程、旨(おい)しそうに、人にもすすめ、自分もスイスイと飲む。「眼玉も悪いし、耳もさっぱりアカンで」と、補聴器をかけた顔を突き出して、酒をすすめた相手の盃に、なみなみと酒が満たされたかどうかを、傍に居る大野新君に、「お前、ええか、確認しとくれや」と、何べんも催促する。「ああ、確認した、確認した」と答えると、そうか、そうか、と安心したふりをして、顔をひっこめ、自分も旨しそうに、ふむ、ふむと頷きながら飲む。

ほんまに眼玉(めだま)がアカンさかい、テレビもよう見よらんし、せっかくの仲秋の季節が来て

近江詩人会、「鬼」、「真珠」。

あなたの業績は、また多くの仲間を育て、励ますこととなりました。

あなたが、若い日に上京されて、堀口大学師から受けられた、一個のリンゴ、それは、幾たびお聞きしても、本当の詩人と詩人との、出会ひの思ひ出として、楽しいものでした、さうして、あなたも、私たちに有形無形のリンゴを頒け与へて下さったのです。

長浜の雪の日には、なほさらに赤く輝やくリンゴ、品のよい香りと、心に栄養を満たすものを、何時までも大切にたもち続けたいと思ひます。

あなたとの、永のお別れに際しまして、この誓ひの言葉を、私たちは捧げます。

武田さん、長浜のおっちゃん、

さようなら、どうぞ安らかにお睡り下さい。

昭和六十三年十二月二十三日

近江詩人会代表　藤野　一雄

武田豊氏略歴

明治42年6月7日	琵琶湖畔北の竹生村安養寺で生まれる。小学6年生の春に眼を病み退学。
大正15年	回復後、中学講義録で独学。村役場に書記見習として勤めるかたわら詩作するようになる。
昭和8年4月	上京。紙問屋で働きながら、堀口大学の門を叩き、ボン書店発行の「レスプリ・ヌーボー」の同人に参加。
昭和11年暮	母病気で帰郷。家業の農仕事を手伝う。
昭和15年春	長浜に定住し古本屋（ラリルレロ書店）を開業。母方の叔父中村の姓を継ぐ。
	戦中戦後6年ほど中部日本新聞記者をしていたが、耳や目をわるくして退社。
昭和25年8月	田中克己・井上多喜三郎らと近江詩人会創立に参加。
昭和29年1月	近江詩人会の若い俊英同人4人と詩誌「鬼」を発行。主宰。後全国的にすぐれた詩人たち天野忠・石原吉郎らを同人とし、別巻を含め55号（昭和47年）を刊行する。
昭和42年8月	長浜市の同人をあつめて、詩誌「真珠」を発行。中川逸司の編集により、続刊中。56号まで既刊。
昭和63年12月21日	脳硬塞により逝去。

詩集

昭和26年	『晴着』　堀口大学序。コルボウ詩話会刊　B6判横長袋とじ。56ページ。なお、戦前に辻潤らダダイストの影響をうけた『たるぎ花』『旗旗旗・無数の』の二冊がある
昭和36年	『ネジの孤独』『武田豊詩集』『ネジの孤独』は、B5判110ページ。『武田豊詩集』はB5判48ページ、9ポ3段組で既発表全作品をおさめる。二冊をいっしょに函入りとしている。
昭和44年	『指を憎む』A5判84ページ。函入り。関西書院刊。
昭和55年	未刊詩篇を含めた全詩集。『武田豊詩集』A5判232ページ9ポ2段組。関西書院刊。

も、名月や座頭の妻の泣く夜かな、というあんばいやさかいなあ、と奥さんの方を、左の肱でこづくようなふりをした。立ったり座ったりのもてなしで、奥さんは聞こえんふりをしている。

「これ、おかみさん、おかみさん」と、奥さんをそう呼んで、あれ持ってきて、これ持って来いと、お客に招ばれた私たちに、躍起になって精一杯のサービスをして呉れる。おかみさんは、その都度、おっちゃんに大きめの声で返事してパタパタと大へん忙がしい。

表の間は古本の店を出していて、漫画雑誌と娯楽本や文庫本等がぎっしり、三方の棚と前の置台につまっている。七八年も前だったかに会ったとき、古本屋商売の話が出て、「うちらの客は、悪者がしまいにバッサリ斬られて、もうかなわんというところまで書いてある本やないと、納得して買うて呉れよらんのや」と言っていたが、このごろはその連中も、漫画本やエロ雑誌に変ってきたらしい話である。あのとき、棚の隅の方に、埃をかぶってストリンドベルグの『赤い部屋』が一冊チョコンと金の背文字を見せていたような記憶がぼんやりとあるのだが——。

その古本店経営を殆ど、おかみさんがとりしきっていて、おっちゃんが店番しているときは、いっこうに愛想無しで、客が寄りつかないそうな。その代りおっちゃんには、男女の年寄りが「身上相談」に来る。そういうときは、帳場の上り端に、「まあ、かけいな」と腰をおろさせ、ゆっくり相手の話をしまいまで聞いてやる（あの不自由な耳で）。そしてお得意の、むかし惚れきった牧水の歌や佐藤春夫の詩やらを引張り出して、めんめんとおっちゃん調の説教ぶしをきかせてやる。こういう時は、おっちゃんは自分のいい調子にほんとうの涙を出す。たいていの年寄りは、よろこんで「また来るでなあ」と言って、満足して、お寺詣りのかえりみたいに気持をスッとさせて帰って行くそうである。

明治四二年（一九〇九年）生れというから私と同年である。足は達者だが、「眼玉」が悪いから、ステッキで探るようにしながらも、はたからの手を頼りに、人並みの歩調で元気に歩く。長浜の名所を案内して呉れるのだが、「この方角に何々が見える筈やが」と世話役の大野新君にたずねて、見えると言えば「そんならそこをこう曲って」という工合に、胸算用みたいな眼算用みたいな勘で、連れて行こうとするので、もう一つ頼り甲斐がない。豊公園という、おっちゃんの名前が付いたような見晴らしの、カラッと気持の良い、新出来のハイカラな名所に行って、琵琶湖に突き出た突提のような狭いコンクリート道を、トットットと行き出したので、周章てて腕を押さえた。胸算用ちがいをときどきする。すこし曇り加減のようで、右手にある筈の（とおっちゃんの言う）竹生島が見えない。女子学生らしいのが、勇しく本式の端艇競争の練習をしている。白い浮標がかもめのように見える。おっちゃんが頼まれて作ったという土地を賛美した歌詞の中の「鳰」なんていうのは、てんと見当らぬ。おっちゃんも古歌の美辞麗句から、要領よく借用して、さしみのツマみたいに「何とか何とかに鳰浮ぶ」なんてすまして書いているが。

若いときから東京に出て、さんざ、力仕事、働き人のしんどい苦労の中で、当時一番ハイカラな詩を書いてきた人らしくない、いまはもっさりと月並みなめしを食ってきた顔をしている。「わしは倖せもんじゃ」と何べんも言う。そう言うときは、いまにも泣きそうな、自分でもホロリとした調子で言う。このごろは、泣き上戸になったようで、と傍の大野君が口を添える。子供運と兄弟運と女房運に恵まれて、本人の言うとおり、私も、おっちゃんは眼玉と耳の不自由な分以上にずいぶん後生楽なように思う。

いきなり、ズボンの足をごろんと畳の上に片っ方投出して、ごろつきが貧乏人の家に土足で上り込んで、無法無態をわめきちらす真似をして見せて、「こんな具合に、何んでも彼んでも黒を白といいくるめるような無茶苦茶な悪態吐いて、あっちこっちに非道な仕打ちを、わしは前生にして来たかも知れんのに、こんなに安楽に暮らさせてもろうて、なあ、忠さん、（ここでその投出した足を引込めて）わしは倖せもんじゃ」と泣きじゃくるような、それにほんのり陶酔しているような御機嫌の調子で言う。おっちゃんの演じるごろつきは、如何にも田舎芝居にでも出て来そうな大時代がかっていておかしい。

女優さんのように美しく化粧した、体格の良い娘さん（この娘さんも良家に嫁いでいる）が用事で来合せていたが、お父さん、お父さんとニコニコして、歯切れよく何かと世話をみてやっている。廊下には、兄さん使うてや、と弟達から贈って呉れたという電気按摩機？がでんと据えてあり、カラーテレビも子供達が買うて呉れたんや、というとおりパリッとしたのが茶の間と、もう一つ廊下の隅のと二台もある。うんうんと何べんも、おっちゃんの眼玉に、はっきりうつるように大仰にうなづいて、おっちゃんは倖せもんじゃ、とこっちも合槌をうつ。そうすると向うも、判ってくれたか、そうか、そうか、とつばのたまった口を歪めながらうれしそうに合槌をうっている。

おっちゃんは昔から牧水のうたが好きで、一寸お酒が入ると、（身上相談に来たわけではない私等にも）宙でおぼえた短歌を、話の合間に小器用に入れる。この話のあとにはこれを、この話の前にはこれを、という工合の自分流のコツを心得てしまったらしい。何かのひょうしに、吉植庄亮の例の「わがまらをまさぐる妻のやはら手をしりつつゆべはねてしまひたり」を、おどけた口調でひょいと披露し、「これをいう段になると、おかみさんが、言うな、言うなって袖を引くのやがな」と、袖を引かれるまねをしてみせて、ウへへへと笑って、直ぐケロッとした。

しばらくするとまた前に返って、例の泣きじゃくる調子で、いきなりごろんと片足を投げ出して、「黒を白といいくるめて」と前生の悪業悪態ぶりをやり出す。その合間に何べんも、のんでおくれや、のんでおくれや、を繰返し、大野君、おまえ、よう確認しとくれや、と念を押す。こっちはその都度、確認されたふりをして、空の盃をのみ干す。

堀口大学さんの八十歳のお祝いだったかに夫婦で上京して、「先生にはもうおめにかかれんと思てたのに、こうしてお達者な姿を見せてもろうて、私は満足です、と言うたら、先生は（ここでこっちをにらみつけるように力を入れて）、なあ、忠さん、堀口先生は、武田君、わしはまだ満足せえせん、まだ満足せえへん、そない言わはったんやぜッ」感極ったように、半分泣き声になって、からだを乗り出してそう言う。奥さんも横に座ってシンとしている。

たぶん、堀口大学大先生は、八十歳になっても、長寿の祝いを受けても、まだまだ仕上げ度い仕事やら何やらが沢山残っていて、これではまだまだ満足出来んわい、とそういう腹であったのかもしれない。耳と目の悪い武田のおっちゃんが、どうそれをうけとめ、こんなに感激してめんめんと涙声で語るのか、一方通行のおっちゃんの話に、こっちはただ合槌をうつばかりで、そうか、そうかとただその感激ぶりに感心して聞きすごしてばかりいたのだったが。

目抜通りの一番はしっこにあるおっちゃんの古本店には、どう見ても看板らしいものは出ていなかった。たしかラリルレロ書店とおっちゃんは名付けていた筈である。

—我が感傷的アンソロジイ（一九八八年三月）

湖北のひと—武田豊

河野仁昭

　去る四月十五日に、錦林車庫近くの尼寺換骨堂で詩誌『骨』同人の物故者の追悼会がいとなまれた。『骨』は、先年（昭和五十一年二月）五十号を出してそれきりになっているが、同人はなにかにかこつけてはときおり集まっているようだ。それにしても、物故者は十人ちかく、健在な同人よりも多いことを知って、ちょっと驚いた。日本人の平均寿命よりは、みな早く世を去られた。人一倍多忙なひとの集まりのせいかもしれない。

　わたしは同人ではないが、親しくしていただいている関係でご案内をいただいたので、定刻まえに尼寺へいった。木々の新芽が、ういういしく美しかった。遺族も何名か来ておられた。

　会の途中で、故人の詩を同人や遺族が朗読した。わたしなら別の詩をえらびたい、と思うような作品もあったが、尼寺の一室で冷酒を飲みながら聞いていると、どのひとの詩にも、それぞれ特別の味わいがあってよかった。詩の味は、場所や雰囲気によっても微妙にちがうようである。

　わたしも朗読するように指名されたが眼鏡を持ってこなかったので、活字の輪郭が鮮明に見えない。「眼鏡がないので、折角ですが駄目なんです」と『骨』のバックナンバーを広げて当惑ぎみにいったら、大笑いになって朗読はかんべんしてもらえた。みんな眼鏡をかけかえたりはずしたりして朗読していた。だからわかってもらえた。

　わたしはふと、長浜の武田豊さんを思った。物故者のなかに安土の井上多喜三郎さんもはいっていて、武田さんは井上さんの大の仲良しだった。人々は、井上さんのことを「多喜さん」といまも呼び、武田さんを「武田のおっちゃん」と呼ぶ。武田のおっちゃんは健在だ、健在だが『骨』の同人ではないだけでなく、少年期の終りころから眼をわずらわれて、いつも虫眼鏡のような眼鏡をかけている。おまけに、ものすごく耳がとおくなって、最近は補聴器を耳の穴にさしこんでいる。それでもひとの顔ははっきりせず、話はまるできこえないらしくて、出版記念会のときなど、だれかがスピーチをしていようがいまいがおかまいなしに、「大野、新君をなァ、よろしゅう頼む。ホン。あの君は、京へ、つとめに行きよるんやわな、京のひとみたいなもんや、ホン」などと、突然いいだされてドギマギさせられることがある。最近は、一人だと乗り物で出掛けるのが困難で、そうした会にもあまり出られないらしい。

　交通事故で亡くなった多喜さんのお葬式が、お家の近くの西老蘇のお寺であったとき、武田のおっちゃんが友人を代表して弔辞を読んだ。弔辞は、たとう紙のような大きい広い和紙に、一字一字墨で大きく文字を書いたものであった。おっちゃんはそれを、うやうやしく拡げて、両手で捧げるように持って、紙面に眼鏡をこすりつけるようにして、一語一語ていねいに読んだ。文字の行が変るときは、紙の上端まで顔をあげなければいけないので、次の行とことばがうまく続かないことがあって、独特のイントネーションで、「多喜さん、あな、たはどうして、死んでしまったのか」というふうに読んだ。おっちゃんは、泣いているようだった。眼玉も眼鏡もくもってしまって、普通なら見える大きさの文字が、ぼやけて見えなくなってしまったらしい。そこまでは、おっちゃんは計算にいれていなかったのだろう。いれていたとしても、どうしようもないことだ。ことばはしばしばとぎれた。

　わたしは、そのときにわかに、武田のおっちゃんが好きになった。

木枯らしは
キーン　キーン　キン　吹いているか
ドオー　ドオー　ドウ　吹いているか
ヒュン　ヒュン　ヒュウ　吹いているの
か
月夜の町はずれの道で僕は妻に尋ねる
あんなにミカン水のように光っている小
川は
チュウ　チュウ　チュ　流れているのだ
ろう
あそこに高いしゅろの樹は
バタ　バタ　バタ　バサ　バサ
そのどちらの音が鳴っているかまた妻に
尋ねる

妻は考えてくれた
ヒュン　ヒュン　ヒューと風は
ペロロ　ペロロ　ペロと小川は
バタ　バタ　バタとしゅろの樹は

僕はたたずむ　目を閉じて
すると今ある風景の裏側に
もう一ッ黒い版画のように映る風景があ
る
それが真物のように判然として
耳の奥に残る遠い記憶の音を呼び戻す
ヒュン　ヒュ　ペロン　ペロン　バタ
バタ
妻も立ち止まった僕をふり向いて立ち止
っている

雁が渡る
それは妻が指さして言うのである
だが近視の僕の眼はそこまで届かぬ
なおこわれた僕の耳には
ササ　サ　サ　サ　サ　サ　サ
羽根を連ねて渡る羽音が聴こえない
雁渡る　それは妻が指さして言うのであ
る
僕は妻を抱きよせてささやく
——木枯らしの月夜の道で——
聴きたい雁の声を——見たいその形象を

（「雁渡る」）

　この詩は、昭和四十四年十二月に出された『指を憎む』という詩集の巻頭の詩だ。この詩集を出される四、五年まえに『ネジの孤独』というのを出版されて、確かわたしはそれもいただいたはずだが、さんざん探したが見当らない。『ネジの孤独』の作品のほうがよかったような記憶をもちながら、『指を憎む』の紹介文を『京都新聞』に書いたことがある。なにを書いたかは忘れてしまった。

　小男の、武田のおっちゃんの頭には、一本も髪の毛がない。近眼鏡をかけたそのおっちゃんが、「僕は妻を抱きよせてささやく」というふうに書いているのを読むと、たいへんおかしい。存在そのものがとてもユーモラスで、おっちゃんが真面目になればなるほど（いつも大真面目のようだが）、いっそうおかしい。その大真面目でとぼけているところに、おっちゃんの詩の独特のユーモラスな味がある。故人になった安藤真澄さんの詩にもそういうところがあったが、安藤さんはそれをかなり意識して書いていたように思う。武田のおっちゃんがどこまでそれを意識しているか、作者の印象がつよいだけに、わたしにはわからない。意図的に効果をねらっているのではない気がするが、よくわからない。

　武田さんは戦後、『鬼』という詩誌を主宰しておられて、確か大野新が詩を書きはじめたのは、『詩学』などへの投稿を除いてその『鬼』であった。彼から幾冊かもらった記憶があるし、それ以後もおっちゃんがわざわざ送って下さった。しかし、送って下さるころには、大野新はわたしたちと『ノッポとチビ』をはじめていたから、作品は掲載していなか

ったと思う。『鬼』は武田のおっちゃんの個人的な詩誌であっても、そこから育ったひとは、大野をはじめ少なくないはずだ。天野忠さんも書いていた。

あれやこれや思ってみると、武田のおっちゃんはほんとうに詩が好きで、湖北の町で書店を営みながら、ポソポソ詩を書いたり詩誌を出したりすることで、生を支えてこられたのではないかという気がする。おっちゃんの人生にとって、詩はじつに大きな意味をもっているし、とくに眼や耳をわるくされて以降、もしおっちゃんに詩がなかったら、その人生はきっと索漠たるものだったろう。詩のもっとも純粋な創造と享受を、武田のおっちゃんは実践しておられるひとだ。詩にも詩人にもいろいろあろうが、詩を世俗的な道具や手段のようにもち扱ったり考えたりするひとを、わたしは好きになれない。

『鬼』も、久しく出ていない。そしてわたしは長浜という町についていは、なにも知らない。それは北陸線の特急が通過する町だった。通過するたびに、ここが武田のおっちゃんがいる町だ、とわたしは思った。その北陸線も湖西線が開通してからは、通過する町でさえなくなった。だが、北陸線に乗ると、一度も町並を歩いたことのない長浜と、そこに住んで小さい書店をいとなんでいるという武田のおっちゃんを思う。おっちゃんの風姿にぴったり重なりあっているような詩を思う。

　義なきをもて義とす
　親鸞は呟いた
　北陸の春はほうけていた
　　（中略）
　煩悩の五十余年
　迷いを破ったつもりの後から
　また　迷いが起って来る
　考えながら歩いていると
　便意をふともよおしてきた
　あいにく辺りは田畑ばかりで
　用達しを借りる一軒の家もない
　親鸞は走った　近くの低い菜畑へ
　義なきをもて義とす　また呟いた
　向うの田圃に白鷺が何羽も降りていた
　衣の袖をさぐったが
　やっぱり一枚の懐紙もない
　昨日から手鼻だった
　傍の蕪の葉を二枚引きもいだ
　立ち上がりながら
　生々した葉を　主ある物を
　こころなく犯したことを悔んだ
　　（中略）
　親鸞は念仏した
　南無阿弥陀仏
　南無阿弥陀仏
　そうして自己の計らいでは
　救いのないことを深く確認した
　　　　　　　（「無義意義」部分）

長浜の春も、いまころはほうけているだろう。武田のおっちゃんは、お元気なのだろうか。

（「短歌世代」昭和五十四年七月）

武田豊（おっさん）との出会い

中川逸司

人との出会いは偶然だが、私もおっさんを知り得て以来詩を書いてきて、すでに四十年近くになったのである。おっさんを知りえたことは私の人生にどれだけの色取りを持たせてくれたことか。武田豊を一本の樹にすれば私はその木の影で昼夜のようにぐるぐる廻っていた感じがするのである。そして今、おっさん亡き後も私の生ある限り、いい人たちと出会う幸を得続けて行くだろう。

わが国の敗戦で中国から帰って呆っとしていた時期、長浜での文化集団「辻馬車」の会

員に。田中克己さんの彦根短大赴任を機に、井上多喜三郎、小林英俊他の恵まれた先達により発足した近江詩人会に加えて頂き、おっさんとあちこちの会場を連れだってめぐり。全国的同人誌「鬼」にもその末席にも無力にかゝわらず加えて頂き、有力な詩人たちとも出会い、いずれも、おっさんのお蔭と身に泌みて思っている今日である。

おっさんとは余りにも身近かなため葬送には泣けてきそうなので弔辞を読むことは許して頂いた次第だが、いい人たちとの出会いの、有難さに事よせて記録的な文に終り追悼の用を果たせないけれど御許しを願う次第です。

近江の風土に生れた近江詩人会の今はすでに亡い先達詩人達のお顔と、武田豊おっさんの顔と並べながら、私もすでに老人会の一員になっている今日の幸を思いつつ駄文を閉じたいと思います。

詩友・武田豊さんの思い出

鈴木寅蔵

近江詩人会の会長であった武田豊さんは、人の面倒見が良く、会の調和や後進の会員の指導に事欠かさなかった。長浜で本屋を経営、詩の仲間達は愛称で武田のおっちゃんで通っていた。

所で去年の暮れに武田さんが逝去され、心から哀悼の意を表し、御冥福をお祈り致しつつ、生前のご交誼に厚く御礼申し上げます。

武田さんに初めて出逢ったのは、戦前の夏安土の西老蘇の井上多喜三郎さんの家で、小林英俊さんらと同席の折だった。武田さんはむっつりしていて、帰途一里近い駅までの暑い田舎道を黙って歩いた。いま思うと彼は眼と耳が、不自由だったせいだと頷く。

戦争が激しくなった頃、彼は中日新聞社に私は滋賀新聞社へ各々入社した。その頃は詩も思う様に書けないが、記者で共に生活を支えて来た。

武田さんは二十三歳の時、処女詩集「たぎる花」二年後に「旗旗旗無数の」を出版し、その翌年昭和八年四月に彼は上京して、土工や製本屋に雇われ、疲労でへとへとの身を雨の公休日に、堀口大学氏の門を叩いて、親しく迎えられ、詩への志望をたぎらせた。その後貧しい生活の中から、「絵のない絵本」を出した。それが斬新の詩人グループに迎えられた。十一年の春に母が倒れ帰郷していたが長引き、兄が出征で実家の農業を手伝う。

十五年の夏、長浜で古本屋を営む。その頃から耳と視力が一層衰えた。それを知った堀口氏が、太字書きの万年筆を彼に贈られた。

二十五年の八月に、近江詩人会が発足。テキスト一号に彼は「太い指」と題して、従弟の出征と戦死を当時の世相の明暗を書いている。

その十月に武田家で、東京の田中冬二・岩佐東一郎氏を囲んで、田中克己・陵木静・小林英俊・井上多喜三郎・岩崎昭弥・鈴木らが懇親の会を開いた。記念写真に彼の奥さんや子達も一緒で、和やかさを添えた。

二十六年二月、彼は詩集『晴着』を出し、堀口氏が序文を寄せている。その後私は時折り彼の店に立寄り、長浜名物の焼豆腐のご馳走になった。御一家のご愛想の良いのは、誰でも感銘していた。湖北の詩友達で中川逸司・三和愛子・肥田文子・田中正子さんらと店先でよく出逢った。彼は私の子供に「絵本を」と云うと、奥さんが包んでやって下さった。それは孫にまでの三十余年の温い贈り物だった。

近江詩人会の月例会は主として、彦根で開かれていたが、年に二、三回は会員宅で催され、私の宅でもあった折に彼も遠路来て泊られた。翌朝散歩して田舎の触目を詩作した。

二十九年一月に彼は詩人会の優等生らと、詩誌「鬼」を発行した。その仲間から石原吉

郎氏がＨ氏賞を受け、後年に大野新氏も同賞を受けている。正に詩魂の鬼とも云える。

三十二年八月に近江詩人会のアンソロジー「滋賀詩集」の代表の武田さんが、私の詩「猟人日記」を激賞し、肩を叩いて、「詩集を出せ」と励ましてくれた、彼の言葉が忘れられない。

三十六年十二月「ネジの孤独」を彼は出版し、翌二月の記念会には堀口氏が来訪され祝辞を述べられた。その席で私は若い頃、文芸誌「若草」に投稿していた選者の堀口先生にお逢い出来て、当時の頃を追想した。その夜は長浜市長の計らいの旅館へ先生は泊られ、私は武田さん宅で泊めてもらい厚いお世話になった。翌朝彼と先生の宿へ伺うと、私に色紙を書いて下さった。市長の車に先生らと同乗して慶雲館の盆梅に案内された。市長が乞われた色紙に先生は即興詩を書かれた。その詩が今も盆梅のポスターになっている。

四十四年八月に彼は詩集「指を憎む」戦争の引金を引いた指を、自分の行為として憎んでいる。その四年後「長浜の灯」、更に七年後、武田豊定本詩集を眼と耳の悪化のなか奥さんの協力を得て、出版された詩への気迫を銘記したい。また彼は詩人会員の葬儀に臨席の折には、弔詞を献じる律義な人であった。

晩年の彼は出逢って別れる時に、私の手を痛いほど握って、「奥さんを大切にせよ」と、常に注告してくれた。その友情の声を忘れてはならない。

武田のおっちゃんのこと

田井中　弘

いつだったか、日記を探せばいいわけなのだが億劫である。昭和二十五年頃、教職員の体育大会が長浜であり、私は卓球選手として出場し、優勝戦で敗れた。まだ時間があったので、ふと思いつき、「ラリルレロ書店」の武田のおっちゃんを訪ねた。十一月の肌寒い頃であった。ひなびた通りの、曲がり角からしばらくして、漸くすすびた書店を見つけた。それにふさわしいようなすすびた書籍が並んでいる。客は誰一人いない。私が入って行くと暗い奥から、電灯の光りでか、まるい眼鏡を下げて、頰のこけた年よりじみて見える、中年の男がじろりと、うさんくさそうに私を見た。着流しの和服が、いかにもだるそうに、その体を包んでいる。

「今日は！」と挨拶すると、こちらが名乗る前に、

「田井中君か」とぶっきらぼうに返ってきた。

腰かけて、三十分も話しただろうか、僕は話下手だし、武田さんも、ぼそぼそとしか話さない。ダダイスト、ゆたか・たけだ、といった風貌ではなく、野暮ったいダダイストだなあと、思いながらも、次第に好感を抱いていったのを覚えている。奥さんが、出がらしのお茶をついで下さった、そのしぶさが、今も舌先に残っている。

私はその頃、生意気に「近江詩人会」を軽蔑している所があって、甚しく自惚れが強く、武田のおっちゃんの作品についても、本当に理解してはいなかった。

いつの間にか「近江詩人会」からも、「詩」の仲間からも離れて、ただ一人で、ぼつぼつ小説ばかり書いていて、二千枚の予定を七、八百枚まで書いて、いつか中絶してしまっていた。念頭には小説のストーリィのみ、いくつかあって、日々その展開ばかりを考えては、自己嫌悪に落ちていた。

ふたたび、しきりに詩を書き出し、「近江詩人会」にも再加入して、毎月出席するようになったのは、昭和四十年頃からだった。まもなく井上多喜さんが死去され、武田のおっちゃんを、次期、近江詩人会の会長にと、推挙したのを今もはっきり覚えている。

その頃から目を悪くされていて、虫眼鏡で活字を追い、補聴器もつけておられたのが、半ばはいたいたしく思い、例のように滅多に人の作を賞めることなく、ぼそぼそと話されるが、どことなく愛敬があって飄逸だった。

中川逸司さんが、いつも、おっちゃんをかばうように、手を添えられたりしているのが、目立たない親切さがあって、おっちゃん、しあわせだなあ、と妙に感銘深かった。正直おそらく長生きされるまい。と私だけでなく、言わないだけで誰もが思っていたに違いない。

しかし、詩誌「鬼」は健在だった。大野新君がＨ氏賞を受賞した時も、おそらく来られまいと思ったのに、つき添われながら、東京まで見えた。まるで弟に、あるいは愛弟子に対するような、喜びがその表情にあった。

その時も、そう長くは生きられまい、と率直に、感じたものであった。柳の雪折れではなくって、詩の鬼の執念だったろう。よく生き続けて下さった。という方が追悼する気持ちより強い。

和服の着流しの、眼鏡ごしのうさん臭そうな眸が、まだじっと私を見ている。

オッチャンとの　ある関わりかた

中川　郁雄

数名で雑談をしながら安土の街を歩いていた。おそらく駅からタキさんの家に向っている道中であったと思う。だから大変ふるい話なのである。武田さんは当時からオッチャンと呼ばれていた。フルネームはタケダのオッチャンなのである。今からいえば熟年の時代であったろう。僅かな商品をそろえた埃のかむった商家街をぬけて少しするとパッと明るい光がさしてきた。鈴鹿の山麓までつゞいているかと思わせるように向うの小さな集落が目にはいらないような見事さで紫雲英の花のつまった風景が展開する。

わがオッチャンは歩きながらの談笑の群からするすると抜け出すと田圃におりて紫雲英の絨緞にとびこむ。二、三回は紫のうえを転がって大の字になって空を仰ぐのである。初夏のさわやかな風景を全身で吸いとるように動かない。

なぜか私は条件反射のようにストリップ劇場の出ベソに這いあがり、眩しい赤色のライトを浴びながら立派でもないオチンチンを曝して悶えている姿を想像する。私が悶えているのでありまして、客観的に言えばあいかわらずの墜落願望なのである。

こんな時に私の卑しい思いが出るのですなあ。無心のオッチャンに『やるじゃないの』と内心で呟きながら、そしらぬ顔をして、いやフツウの人間の顔をしてオッチャンを横目でみながら白昼の田舎道をポコポコと通りすぎてしまったのである。

しばらくして、オッチャンを中心とする詩集団「鬼」にいれてもらうことになる。オッチャンと鬼についてはオッチャンを語る場合に欠くことのできない部分だと思っている。もっとも鬼については先輩たちが触れると思うので、鬼を背景とした劣等生の私とオッチャンのことだけを書くことにする。

とにかく『鬼』はＢ５版の白い紙に朱色で５㎝巾に鬼と刷りこんだ朱が鮮かに目立つ表紙であった。この朱はオッチャンの詩に燃える執念の象徴のように思われたのである。また鬼の原稿用紙を作製した。これを法被のように身にまとい、皆んなで鬼の神輿を担ごうや、ワッショイといこうや――との息がオッチャンにあった。だからオッチャンは独りで燃えるのでなく私のように出来の悪いのにも手をさしのべ、肩をかして「オマエハナア」

と例の熱っぽい声で呼びかけてくれるのである。高校野球の熱血監督のように『いっしょに燃えよう』とオッチャンはねばり強く燃えつゞけていた。

オッチャンが燃えつゞけて炎を送ってくれるのに肝心の私はキナ臭く燻るのみだった。オッチャンすまんことでした。

燃えるべき素質がなかったのか、燃える根性がなかったのか確かに炎が出ないのに燃え滓が残っていたという惨めさである。

焼け跡の私にでも会うたびに激励をしてくれるのであった。

ありがとうございました。

オッチャンはご自分の身体の支えが効かなくなっても会えば『頑張れやナア』と肩をたゝいてくれるのである。

〃武田豊もその中にいた　木村三千子　享年五十三
海は黒く静かだった〃
（武田豊「その中にいた」部分）

武田さんの訃報に接したとき、この詩があった事を思い出した。夜の海での遭難死、船室の客の状態に仮託されての詩であった。

井上多喜さんの輪禍による急逝に刺戟されて、と思ってもみたが、それでは53歳にひっかかってしまう。

ともかく海難現場が、怒濤さかまく玄界灘でも風雪きびしい日本海でもなく、淡路島から一時間後の座礁なので、アレッと思った。瀬戸内海というと、ひねもすのたりのたりかな、の感覚である。

その設定場所とこの詩の終結部分を、武田さんらしいと思う。

〃セロハン紙のように透明する
意識の中で火をこめて
僕の伏せた詩集を摑もうとあせった〃

このような持味を別にして、この頃の作品には、人間の命や戦争を深くえぐっておられる迫力に満ちたものが多い。

目と耳、そのハンディを乗り越えられての長い詩歴、見事な足跡を印された武田さん、この時代が最も音量のあがっていた季節ではないだろうか。

それは先程の詩が収録されている（指を憎む）のあとがきでも言っておられるように、〃鈎だけはいつも磨いて、危険を承知で大物の喰いつく絶壁の岩肌に身をさらす〃という詩作態度からも窺い知ることが出来る。

そして又、武田さんの文章と向いあっていると、行間に独特の音符が埋め込まれているのでは？と思ってしまうほど、何時のまにか武田ぶしの抑揚で読んでいる自分に気づく。

とりわけ印象ぶかいのは、多喜さんのお葬式での弔辞である。

亡くなられたのが4月1日だったので〃エプリルフールの悲しい出来事〃とあった。

エプリルフールの持つ語感と、悲しい出来事の接合部分の武田ぶしの絶妙さ、その心にしみる音色は、今でもあざやかに耳の中に残っている。

今年の4月1日は多喜さんとご一緒ですネ。

長浜と云えば武田さん

谷川文子

武田さんと云えばらりるれろ

古本を並べた台を前に、本を読んでいた武田さんが、度の強い目鏡の目をあげて、来訪者を見定めたときの、はじけるようなあの笑顔。もう見ることができない。

暖かくなったらお訪ねします、そんなことを書きながら、行けぬまま、永遠の別れをしてしまったことが残念でならぬ。

思えば長いおつきあいであった。

武田さんは、喜びの顔も、てれた顔も、少年のようであった。毛ほどの悪意も持たない純粋な人であった。目を悪くし、耳を悪くした武田さんは、そのため露程の傲慢さも持つことなく、愛すべき一生を送られた。清らかな人生を送られた。

見えないこと、聞えないこと、はせつないことだ。しかしひょっとすると、それが武田さんの幸せのもとでになっていたのかも、と思う。美しく聡明な奥さんにつき添われ、やさしい息子さんに守られて、一途に詩に打ち込めた武田さんは、幸せだったと思えるから。

敗戦後のまだ困窮の時代、共存会館で詩話会が続いた頃、ときたまお菓子が出たりすると、子供さんに、と持たせてくださったりもした。詩にも詩人にも関心のない我が家の家族も、不思議に武田さんの名は記憶していて、訃報を聞いたとき、武田さんが？　と淋しい目をしました。詩誌「鬼」の同人に加えてもらって間のない時、「××が（有名な詩人の名だが思い出せない）鬼に女流が加わったのはよかった、と、云ってくれたよ」と云われた。当時私はヘタな上に（今も同じだが）つとめて男みたいな詩を書いていた。詩の原稿が集らないと、遠い私の家まで来て、集りが悪いのだよ。もう暫く待つから、必ず送ってくれよ、と、せつせつと云われるのであった。

武田さんほど、詩に打ちこめない悪い弟子で、ご苦労をかけたなあ、と申しわけない思いが強い。許してください武田さん。不自由な躰の上に、出来の悪い後輩のため、苦労してくださいました。昔、詩話会の席で

「作者なんかけとばしといて、ぱあーっと飛んで行くような詩が書きたいね」と云われました。その時から全く同感でしたが羽は生えません。せめて詩の世界の住人であり続けることで、武田さんを忘れずにいます。

武田さーん

宇田良子

何といってもお葬式のあの空はすばらしかった。お花ぎつねの住む長浜の町は私の行く日はきまって曇っていて寒くて一寸さみしくって　私の住む彦根とはあまりへだたっていないのに言葉も季候も湖北そのものだった。それなのにこの日ばかりはまっ青な空がラリルレロ書店の古風な二楷や隣の旧教会の十字架の上にぜいたくにひろがっていてナムアミダブツもアーメンも、まるで「晴着」を着て旅立つ武田さんへの贈り物のように　おだやかに広がっていた。

「人は生まれた日と同じ天候の日に天に昇る」と云う言伝えがぴったりする様な気がしたばかりか　武田さんはこんな良い天気の日に人を喜ばす為に生まれて来たのかなあ等思いながら葬送客の中で立っていた。

思い返すと　武田さんを知ったのは　近江詩人会第二回目の日であったと思う。それから三十有余年　随分の日が流れたが　いつも別れる時は　例のあの口調で「ウダさん　体を大事にするんやで」と何とも泣けるような言葉をかけて下さったものだった。

一昨年だったか雨の日に濡れる中を　吾家に来て下さったのが武田さんとの最後になった。

近くのバス停まで送りましょうと云うと、「かまへん　かまへん一人で行けるさかいに」と傘もささずに行かれたあの後姿を　ずーっと見送ったのが今でも目にうつるのだが

私のなかでは武田さんも杉本先生も井上多喜さんも小林英俊さんもまだまだ生きていらっしゃって　彼岸も此岸もそのへだてがない。

只一つ残念なことには　未だに人みしりする性の私が素直に「タケダのオッチャン」と呼ばせて頂いたことがなかったことだ。だから今こそ甘えて大きな声で「タケダのおっち

やんありがとうでした　さよなら―」と呼ばして頂く。

オッチャン!!見えてますかァ　合掌

おっちゃん追悼

竹内正企

滋賀文学祭に応募した詩が入選したとき、武田豊氏の色紙を戴いた。もう二十年近くにもなろうか。「野ぶどう色のしじまへ」の一節である。「むらさき色のたそがれ時／まぼろしの鶴のように降りて来て／ひとは……」この詩は武田豊詩集（県文化功労賞受賞記念関西書院発行）の第八集「指を憎む」に出ている。「野ぶどう色のしじまへ」という美的なフレーズは、観念的な幻覚に陶酔できる抒情を秘めている。一途な恍惚となれる性癖が窺えるのだ。第九集には、「長浜の灯」の「片町抒情」がある。「片町をいつも通れば思い出す／わが十八の遠き日よ／友と登りし高殿に……」おっちゃんの銘調子、武田節である。わたしは武田さんの初老から晩年にかけて、近江詩人会でのおつき合いだったが、耳目の不自由な武田さんは、ひとりよがりに愉しんでいられるところがあって、それをみんなが頬笑んでみている倖せな詩人であったと思う。第五集には堀口大学の序文入りの「晴着」がある。「詩は私の晴着／たった一枚の晴着／見て呉れ／このボンボンした／もめんの生地を」武田さんは恐らく生活を越えた詩精神に生きた人であったのだ。でないとこのような詩は書けない。詩人としての自負心、心意気をもっておられたのだ。現在は武田さんのような気骨のある詩人は少なく、詩が衰退していると云われる所以かも知れぬ。

第28回（昭和53年度）H氏賞の受賞式のため、大野新氏に付随して何人か上京した。その帰りに武田、鈴木、藤野の諸先輩に同行して、堀口大学邸を葉山町に尋ねたことがある。武田さんは堀口大学を師と仰いでおられることは、その略歴でわかる。「昭和八年四月上京、紙問屋に働きながら、堀口大学の門を叩き、ボン書店発行の『レスプリ・ヌーボ』の同人に参加した」とある。堀口先生は、われわれ四人の遠客を二階の書斉に案内され、耳の遠い武田さんの忌憚のない武田節に、すっかり寛いでしまわれ、よもやま噺に花が咲いた。文化功労賞を文化勲章と勘違いした祝電を貰われた咄、鉄幹を師にもたれた先生の「短歌は韻律だよ」といわれた言葉、庭の泰山木の大きな白蕾についての考察、「近江の松茸を贈ってくれた武田が来たよ」と奥さんの紹介があったりして、とってもご機嫌がよくて、サイン入りの随想集「水かがみ」をみんなが丁戴した。その翌年だったか念願の文化勲章に輝かれた。わたしは「水かがみ」を読みなおし、何故か大学のエロスの詩脈が武田豊と一脈通じているな、と思えてほくそ笑むのである。

武田さんは竹生島のあるびわ町を故郷にもち、湖北の風土や土俗に根ざした浄土真宗と仏縁があり、何となく情緒をかもちだす「らりるれろ」の古本屋と、懐古調の武田節がダブってくる。おっちゃんと愛称されたこの詩人を、わたしは忘れることが出来ない。

合掌。

武田豊氏を偲ぶ

外村文象

昭和六十三年十一月二十七日午後一時半から日本現代詩人会主催の88文学フェアが大阪府中小企業会館文化ホールで開催された。

司会は大野新氏で詩の朗読は日高てる、井上俊夫の関西勢に加えて高知の片岡文雄氏であった。片岡氏は本年度の地球賞を受賞された。大野氏は片岡氏とのふれあいを近江長浜の武田豊氏が編集する同人誌「鬼」によると語られ、今日が初対面なのであった。「鬼」には石原吉郎氏も毎号作品を寄せておられた。「鬼」は詩を書き始めて日の浅い私にとってまばゆい存在であり、武田氏の並々ならぬ詩への情熱に圧倒された。近江詩人会の例会では井上多喜三郎、杉本長夫氏と共に毎月熱心に後輩の指導に当られた。彦根での例会は十数名の集りだったが熱気に充ちていた。

「鬼」は五十五号で終刊となった。後日、長浜地区の有志によって「真珠」という同人誌が発刊された。武田氏は若い人達を育てることに力を注がれた。琵琶湖で養殖される淡水真珠のように、美しい輝きをみせる作品達に武田氏は目を細めた。

青年時代に上京して堀口大学先生の門をたたいた武田氏は一地方の詩人で終ろうとはしなかった。武田氏は視力と聴力が弱く、そのハンディを背負いながらその分だけ余計に詩への情熱をもやし続けられた。武田氏の作品はごつごつと荒削りなところがあるが、強い信念が貫ぬかれていて読む者に感銘を与えずにはおかない。88文学フェアにおいて大野、片岡の二人の詩人がかつて所属した「鬼」及び武田豊氏の存在が紹介され、武田氏は詩史にあきらかに足跡を残したと言える。

最近私は河野仁昭著「詩のある日々―京都」（京都新聞社刊）を読んで感銘を受けた。その中に「湖北のひと―武田豊」がある。初出は昭和五十四年七月の「短歌世代」である。著者はありし日の武田のおっちゃんの姿をあたたかい眼で描いている。

十二月の中旬頃から武田さんのことが気がかりで（虫の知らせというのだろうか）88文学フェアのことと河野仁昭氏の著作の二件をお知らせしようと思い乍ら一日送りにしていた。もう極度に視力の衰えておられる武田さんには、果して読んでいただけるのかどうか、おくさんの手を煩わすことになるだろうと躊躇した。でもこれはきっと喜ばれるに違いない。あれほど詩に生命がけで取組んでおられるのだからと思い返し、年内にはと思っていた矢先に十二月二十八日におくさんからの喪中のはがきを受取り、武田さんの死を知らされ愕然とした。

出版記念会などには誰かの付添いが必要だった。お出会いすると、体を抱きかゝえるようにして顔を近づけ「元気かな、おくさんを大切にな」と口ぐせのように言われた。人間味豊かな武田さんの死は誠に淋しい。つつしんでご冥福をお祈りしたい。

（「人間」112号より一九八九年五月）

おっちゃんと慕われた　武田豊さんを偲んで

関谷喜与嗣

武田豊さんというよりおっちゃんと慕われておられたこの人がわたしの詩の恩師であり人生の師でありました。

詩一筋に生き抜かれたおっちゃんに会うたびに、口では千日不断忍辱精進とか、一行専心といいながら、一つのことに打ちこめないまま七十の歳を迎えようとしているこの身に八十年の悲願を成就して、ほとけの国に往きゆかれたこの人の手のぬくもりが――ジ――ッ――と、しみこんでまいります。

関谷君「この人生は仏さまが美しい詩の種子をまくために育てていてくださるのやで」「詩がつくれたか」「詩をつくっとくれ」私は詩がつくれないときは、おっちゃんの家の前を通るのがこわいような思いがしました。

あの、度のきつい眼鏡の底から、観すかして、この関所を今日は必ず通る――と、はり番しておられるようにおもえたのです。

ようやく書きあげた詩を「一度みてください」とおっちゃんを尋ねると、新聞広告をいくつもつぎ合した、マジックの黒、青、赤の

の伴奏されたテープを聞いてくれ――といわれたときのうれしそうな顔が眼の前に浮びます。

麻袋のように
草いきれのくさむらに
遺棄された一体のむくろ

半裸の栗いろの肌に
西瓜の種のように
蝿が集っていた

赤い毒いちごに似た弾痕を残して
まだ熟さない青い焔の命を
誰が奪って行った

同じ地球の表で　同じ時間に棲むという
それだけの　それだけの理由で
君にこの若者が何をしたというのだ

昨日より今日へ　今日より明日へ
果てなくふるえる　薄れゆく生の
木ら　鳥ら　獣ら　人らの中に
氷と悪魔の造った
殺戮ということが

たやすく許されてしまってよいのか
（火の怒り〈ベトナム戦線報道写真〉から
指を憎む　詩集　七三頁より）

戦争を憎み、弱い人　しいたげられた人をいたわりつづけられた武田さんは、また「鬼」という、同人詩誌を出版しておられました。「鬼」にのっている詩人になっておくれ――と、一人の詩人を育てるのにいのちをかけておられました。

同人に二人のH氏賞を得た人が出て来たことを誇りとしておられました。

晩年「真珠」は、おっちゃんが眼がほとんどみえなくなられてからのものでした。

近江詩人会に入れていただいたのも、武田豊さんの推せんによるものでした。

いつまでたっても　まともな詩がつくれない私は、せめて　自分のおもいを文字に書きご恩に報いたいと念じつづけているうちに二冊の詩集をつくることができました。「安忍の縄」「常生灯」の薄っぺらな詩集はわたしの母と父に献げる詩であると同時に、今に生き抜く求道者の証しのようなものでしたが、この時も序文をつづって励まし、出版賞として知事賞をもらったとき。わざわざよろこびの色紙をもって愚居をたずねて来てくださいました。

僕も　僕の詩も
長浜の盆梅でありたい
年古り　幹枯れ朽ちて
花凛と　色に香に冴え
（慶雲館即事　堀口大学）

「ネジの孤独」　出版記念が市長さんを中心とする市内外の後援者によって催されたとき、堀口大学先生はこの人を励して、長浜を訪ねられました。

武田さんはこのときのことをいつも喜んでおられました。

中日新聞に「ふるさとの文学」詩編に近江詩壇百余年を武田豊記名で掲載されています。（昭和四九年二月二十八日号によります）

「盆梅を見る堀口大学と筆者」と記された、二人の写真がうつされています。

盆梅の季節になると私はその詩がかけられた床の間にぬかずきながら

盆梅の内にこもっているおっちゃんのまごころをくみとり、盆梅の香りただよう席に坐して、盆梅のように生きぬかれたこの人の八十年を偲ぶのです。

煩悩の五十年
迷いを破ったつもりの後から
また　迷いが起ってくる

となげきなげき、仰ぎ仰いで「義なきを義とす」（指を憎む　詩集　七六頁）より、と詠じておられるように、死のまぎわまで、深く

自分をみつめながら、親鸞上人の念仏信仰の家に育ったことを感謝しつつ「ご恩うれしや」の妙好人的詩聖を貫かれたこの人をお慕い申しています。

さようなら武田豊さん

井上弥寿夫

つたない詩を書いてラリルレロ書店をたずねたのは二十歳頃だった。店番をしていた武田さんは、六〇ワットの電灯を低く下げてメガネに触れんばかりにして読んでくれた。そして近江詩人会の存在と、そこに来れば県下の詩人が集るので勉強すればいゝと教えてくれた。

自分が卑屈になるとき、私の心をさゝえてくれたのが詩であった。武田さんとの出合いが私の詩の出発でもあった。あれから二十五年ほど過ぎてしまったけれど、詩から途中下車したままふらふらと歩いている。

肥田さんの出版記念会に豊公荘で逢ったのが最後になってしまった。私の肩をポンとたゝいて「嫁はんを大事にせなあかんで」といわれたことを覚えている。武田さんにそのことをいわれると、ほんとうにその通りやなあと思うのである。しかし家に帰るといつも忘れてしまう。善良のかたまりのような人、その座がやわらかくぬくもる存在であった。仏さんのような人といえば大げさであろうか。今は仏さんになられたけど、生きておられる時もよく似たような人柄であった。自分に都合の悪いことは聞えてこないのだから、いつもやさしい人であった。

車で駅前を通りかかった時、一人歩道をつえをたよりに歩いてゆかれる姿をちらっと見たことがある。交通量の多い道路を横切る武田さんの姿を想い浮べて、誰れかが手を貸してやってくれるだろうかと思った。もしかしたら武田さんの空似であったのかとさえ思った。

武田豊さん。もう度の強いメガネがなくてもこちら側がはっきり見えることでしょうね。さようなら。

雪の日の師

石内秀典

米原の北　長浜はすべて北陸の気候である。冬は寒くて暗い。底冷えのするその街の、小さな教会のとなりの古本屋の奥に、強度の眼鏡をかけてすわっている老人を畏敬をこめてのぞいて通る日があった。

高校時代、武田さんについて詳しく知る由もなかったが、あの人は大変な詩人なんだと仲間うちではささやいていたことを憶えている。その後、近江詩人会を通じて〃おっちゃん〃に本当に大事にしてもらった。

以来、郷里長浜の詩人は武田さんをおいてなく、武田さん一人なんだという考えが私の中にある。

思い出はあまりにも多いが、なぜかすべて冬の日である。雪のふる日、いつものラリルレロの周囲だけがぽっかり暖く、店の奥で〃おっちゃん〃は、あお臭い学生の私に、あついお茶をすすめて下さった。あの底冷えの長浜はいつも〃おっちゃん〃の暖さとともにある。

そして、私が大阪で結婚したことを聞いて一枚の大きな画用紙にお祝いの詩を書いて下さった。それは私の宝物である。

石内君夫妻に

嵐の
夜道よ
まっすぐ
おゆき

愛の
ランプを
消さない
ように

これは氏の第九集「長浜の灯」に「祝婚歌」として収録されている。

武田豊さんをしのんで

山上まさよ

武田さんとは一度もお出合いすることもかなわず、湖北長浜にいらっしゃるといううわさを耳にするだけで、心はむいても、彦根に住んでいながら足を運ばせなかったことを今、後悔しています。

武田さんを大変よく知られる方々のお話をお伺いし、ただイメージするだけでも、わたしの心はすこしずつふくらんでいけるような、力づけられるようなものを以前から感じてはいましたが、……。

力とか、心とか、形にならないものばかりをただただよりどころとして書いてゆくには、心細くはあるけれど、武田さんを御存知の、素晴しい諸先輩（本当は先生と呼びたい！）の、きびしい視線を充分意識しつつ、何度でも何度でも、書いたり消したり、書き加えたりしていけばいいのだろうかと、今は遺稿となってしまった数々の詩集を前にして武田さんをおもっています。願わくば、時空を越えておそばへ近づきたいとも。

御冥福をお祈り申し上げます。

合掌

光のひと

大野新

きのうわたしは
点眼して暗い検査室にはいり
瞳孔拡大の
灼けつくするどい光をみた
あの視界喪失の脅迫のむこうに
さきごろなくなった
弱視の武田豊さんがぼんやり立っていた
水中でひらく目をしていた
「飛火野の鹿の群にはいっていったかて
わしに見えたのは二・三頭だけやった」
首をよせられてかかえる
鹿の頭部のむこうは
いきなり永遠だっただろう
白内障の手術をしたあとも
あふれる針の光
像をむすばない飛火野
全開の白盲のなかで
女がすはだかで立つ
若いときのふるえを
話したこと
があった

弔辞

―武田豊氏へ

日本現代詩人会は、この度、近江における貴重な詩人、武田豊さんの訃報に接し、まことに残念でなりません。ふかく哀悼の祈りをさゝげます。

武田豊さんは、早くからダダの詩人として評価されました。戦後は、近江詩人会の結成に参加され、耳や目が次第にご不自由になられる身体であるにもかかわらず、会長にもなられて、若い資質を評価し育成されたと遠く聞き及んでおります。

特に、同人詩誌「鬼」を、長浜市において刊行されたことは、戦後詩史のなかで、大きく評価されているところであり、日本現代詩人会編集の『戦後詩資料』のなかでも、重要なページを割いております。

はじめは、近江の地域的な俊秀のあつまりから、次第に全国的な詩人の拠りどころになっていく経過をその資料で知るわけですが、物質的に貧困なあの不自由な時代に、武田豊さん独特のユーモラスで情熱的な、おのれを鞭うつ口調でのはげましが、よく日本の代表作ともなるべき何篇かをうみだしえたことを知ることができます。

武田豊さんの作風は、詩集『晴着』のなかに、余すところなくあらわれていました。その素朴な方言にくるまれた少年のような魂。目や耳が不自由になられた分だけ、魂はひとの魂と直接親密な会話をするようで、その詩は読者のこころをうちました。

それ以後の詩人としての武田豊さんの表現は、平和を乱そうとすること、政治のなかの不純さへの怒りが主流になっています。

次第に外界への接触が不自由になられる身で、そういう思いだけが純粋培養されて炎となるのを私たちはみてきました。

武田豊さん。

詩人の魂に愛された武田豊さん。

その柔かな魂のままで彼岸へ赴かれた武田豊さん。

そちらは魂だけで何不自由なく歩ける世界であろうと思います。

ご冥福を祈ります。

一九八八年十二月二十三日
日本現代詩人会会長　上林　猷夫
代理　大野　新
（大野　新・記）

弔辞

武田さん、たとへ長浜は湖北と云ひながら今日の冷気は身に沁みてきます。

貴方とお別れするとき、何時もあなたは上気嫌で、それは大低お好きなお酒が入ってゐる故でもありませうが、「それでは、皆さんさよなら！」「藤野君さよなら！」と仰言って下さいました。

ご互に、心の裡には、そのうちまた、逢ふてやらう、お逢ひできる、そんな望みがあったからに違ひありません。

しかし、このたびは、お声もかけずに去って仕舞はれましたね。想へば、今年の年頭にこの数十年来変ることのなかった、ラリルレロ書店の、もの寂びた店頭で、お目にかかったのが最後となりました。そのとき奥さんは「三ケ日は孫たちが大勢きて、うちは大変やった」と、嬉しい困りやうを話されましたのに、再たび来る正月を目前にして、あなたは逝って仕舞はれ、皆さんさぞかし、残念にお思ひのことと、お察しするにあまります。

さうです、私が最初に頂戴したのが、あなたが昭和二十六年にお出しになった、詩集「晴着」です。あなたは、こう記してお出でです。

晴着

詩は私の晴着
たった一枚の晴着
見て呉れ
このボンボンした
もめんの生地を――

はじめの「序に代えて」で、あなたが、生涯師と仰ぼがれた、堀口大学師は、「僕の祭するところでは、豊君は詩さえよくなれば、目も、耳も、いらないと思っているのではないだろうか？」

と述べてゐられますが、堀口師が予測された通りに、あなたは、詩の道、文学の道を、あの太い杖をたよりに、それはまた、外見上の弱は弱しさとは別な、ある太いゆたかな詩魂を象徴するものを裡に秘めながら、歩るき通して来られたのです。

真珠

武田　豊追悼特集

NO. 57

〔昭和26年12月　旧長浜公民館にて〕

武田　豊追悼特集

武田　豊の足跡

●滋賀県東浅井郡竹生村（現在・びわ町）大字安養寺に八人兄姉の五人目として明治四十二年六月七日生まれる。

●尋常小学校卒後、講義録などにより独学、村役場に勤めるうち、詩作を始める。

●昭和八年四月、上京、働くうち堀口大学を訪い師事、その間ダダの詩人辻潤を知りその影響をうけ詩を作る。（武田豊作詩態度・宣言）など気を吐く。

●昭和十一年、母病気のため（実兄は兵役）帰郷後も青春の意欲的なダダ的詩を書く。

●昭和十五年、結婚後中村姓となるがペンネームは武田のまま継続、居を当時の長浜町大手通りに定め（現長浜市元浜町）古本屋開業、その間多数の文学愛好者と交遊、峯専治（代表作に「竹生島」あり）・横橋潤等と小雑誌を出す。

●その後、眼・耳を患い中部日本新聞記者を退職、敗戦となる。その直後より若い人たちと交遊中、誰いうとなく「おっちゃん」の愛称でよばれる。

●昭和二十五年、彦根短大に赴任したコギト・四季の詩人田中克己、シベリアより復員した井上多㐂三郎、西條八十門下の小林英俊らにより同年八月近江詩人会の発足に参画。同じ頃、陵木得静・押谷一雄らと長浜詩人会を発足させ活動。

●一方、堀口大学を介し、岩佐東一郎・田中冬二・八幡城太郎・土橋治重・長島三芳ら、関西では天野忠・竹中郁・小野十三郎らの知を得て意欲的詩作を続く。

●昭和二十九年一月、大西作平の提案により彦根の大西宅で近江詩人会内より、中川郁雄・西川勇・中川逸司ら五人により会合して「鬼」発刊。その後、石原吉郎の参加により全国的な注目の場となる。

●県内よりも大野新・沢柳太郎・谷川文子・冬木好・鈴木敏が参加、県外より石原の他、山田博・天野忠・片岡文雄・太田浩・斉藤広志・粕谷栄市・宗昇が加わる。

●昭和四十五年四月、五十五号を出して廃刊。以前よりの眼・耳の病い重くなる故なり。

●一方、昭和四十二年九月、今迄の長浜詩人会を解散一新して「真珠」グループとして発足、十一号より中川逸司に編集をゆずり以後も武田豊の意志をつぎ続刊中。

●昭和六十三年十一月高血圧により長浜市民病院にて療養中、十二月二十一日病かわり突如として永眠。享年八十才。

●詩集　「たぎる花」「旗々無数の」「絵のない絵本」「赤い小函」「晴着」「押入れ」「ネジの孤独」「指を憎む」「長浜の灯」「半盲半聾詩篇」「武田豊詩集」あり。

＜中川逸司・記＞

晴着の詩人へ捧ぐ

藤野一雄

昭和も最後の十二月　暖冬異常といふものの
武田さん　あなたの訃報を聞いた身に
雪を被らぬ伊吹嶺は　如何にも無情の貌でした

北へ　大きく彎曲してびわ湖を抱へてゐる岸辺
くっきり望めたのは工場の煙突ぐらい
かなたに長浜の街並が　淡く浮んで見えてゐた
こちら彦根の私には何時も馴染んだ風景で
をっちゃん　あなたの湖流が回帰してゐます
　ダダイスト　真珠の純情　鬼の叛骨
夜に入れば　北斗の星の下
負けじとばかり水平に煌めくのは
をっちゃん　あなたの長浜の灯でした

詩人学校でも　誰も先生とは云はず
をっちゃん　と呼ばせてもらってゐて
あなたの笑顔には　あの湖北の姉川の桑畑の
みどりのそよぎがありました

詩人武田豊さんの生涯に　私は
四季折々に変容する伊吹嶺の姿を
就中　その冬空の白銀を晴着と仰いでゐるのです

＜彦根市本町＞

武田　豊氏のこと

山田　博

始めて武田さんをお訪ねしたのは昭和三十九年なので、はや二十五年も前のことになる。

石原吉郎氏のお誘いを受けて、詩誌「鬼」へ参加させてもらった私は、主宰者武田さんの剽軽で暖かい作風を「鬼」のバックナンバーで知り、是非お訪ねして御挨拶もしなければと思い立った。時刻表を調べると海南からの日帰りでは、どう勘定しても長浜で一時間余りしか時間がとれない。だが錚錚たるメンバーへ仲間入りするには、あまりにも未熟な自分が不安で堪らず、縋る思いで一目お逢いするだけでもと出かけたのだった。緊張した気持で辿りついた私は、武田さん宅が気安く入れる昔ふうの古本屋で、店の名がラリルレロというのが何だか楽しく、一度にホッとして心が和んだのを思い出す。初対面の私を、まるで旧知のように迎えて下さった武田さんは「石原さんのようなすぐれた人の、片足でも尻尾でもええ、ぎゅっと摑むのや、離したらいけん」と真近かに私を覗きこみ「詩の芽を見つけたらギュッと握りしめ、たらりたらり油汗絞って、とろりとろりと三晩でも五晩でも、ええのがでけるまで煮つめるのや」と蟇の油みたいな事を仰しゃる。私はすっかり嬉しくなり不思議と心が落着き安堵したのだった。楽しい時間はすぐにたってしまう。「もう帰るのか」とわざわざ長浜駅まで送って下さり、固く握手して、「詩はな、社会の所産ともなるべきものを、な、」と念を押すように言われた。未だに私詩の域を出ぬものしか書けない私としては、武田さんにあわす顔がない思いである。やがて列車がつき、窓ごしにもう一度挨拶をと改札口の武田さんを見つめたとたん、私はハッとした。あらぬ方を、キッと見つめておられるのだ。目も耳も不自由なことを、その時になって気づいたというわけではない。だが対話の間中ずっと感じていた善良でユーモラスな人懐っこさの底に、実は意外な孤独の厳しさがあることに気づき心打たれたのだった。私の眼はじんとした。合図しても手応えなく離れてゆく距離の中でしかし私の心はいいようもなく武田さんに密着していったのである。

数えてみると、その後武田さんとお会いしたのは六回。昭和四十年五月、石原吉郎御夫妻が西下、武田さん宅で一泊された時、私もご厄介になった。同年十一月、大野新・山村信男両氏の出版記念会でお会いし、四十二年四月には、拙詩集「掌」の出版記念会へ中川逸司さんと御一緒にご出席いただいた。後日石原吉郎氏を訪ねて上京の途次、夜遅く私は米原駅からタクシーで武田さん宅へかけつけたことがある。この日、実は夕刻までにお訪ねして中川逸司さんとも逢う約束であったのに、私の方に思わぬ事故があり三時間程も時間がずれてしまって中川さんや武田さんに大変ご迷惑をかけてしまったのである。タクシーを待たせて、お詫びを言上する私に、突然の事で弱った弱ったと愛想のしようもないことを気にされながら、「之でも持ってゆかんし」と手許の新聞を押しつけるようにして送り出して下さったのだった。そんな失礼な私を、四十八年には再度長浜へ招いて下さった。中川逸司さんの御案内で市内名所や竹生島まで連れていただいたのだが、一介の詩の書生にすぎない私を、高名な詩人同様に歓待して下さった武田さんの温情は、生涯忘れることのできない思い出である。最後にお目にかかったのは五十三年十月、外村文象氏の出版記念会の時だった。いつもそうだが、お逢いすると固く握手し、肩を抱きかかえるようにして顔を近づけ「元気なか」と言われる。あの人間味豊かな武田さんが、もう居られない。嘘のようだ。信じられない。どの場合の思い出も次々と浮かんできて尽きることがない程だが、何だか目頭が熱くなってきた。もう書けない。皆から、おっちゃんと慕われていた武田のおっちゃん。御冥福をお祈り致します。

〈海南市船尾二六〇—五〇〉

玄冬

三和愛子

今浜のわれの一つ灯ひと吹きに消して風かやもたらす師の訃

今日　チャーナタが昇天した

何事もなかったように
かたみの日常をすべらせている
人人は明かるく
まるで冬が後ずさりしたように
やさしい日和の中で

一陣の風が吹いてきて
灯が消えたのがわかった

かって自在に泳ぎ駆けぬけた
無辺の空
幾千由旬の海

失なわれてしまった
それらの美を
あしたの世界に還すべく
時に鋭く光るまなこが恐かった

弱視の眼と
難聴の耳と
お身は　うつし世の闇を纏いながら
どこまでも太陽だった
師よ
遺愛の真珠は確かに息づきながら
偉大な影を失うということの
薄明に
呼べど　届くすべもない
天のまほら

自在に飛行(ひぎょう)する
チャーナタの姿がはっきり見える

わが灯また消ゆる寒さのしんしんと玄冬深きかなしみはくる

（チャーナタ……賢治の「龍と詩人」より）

〈豊明市栄町南舘三一一九八〇〉

谷　川　文　子

武田さん。いまどこに、どうしておられますか。微笑しながら見ていらっしゃるのでしょう。こちらからは何も見えなくて、さみしいです。逝かれて、日が過ぎました。でも、孤独な夜ふけ、武田さんの詩集を読み返して、善良な魂にふれることはできます。詩篇を読んでいると、武田さんとお話することができます。

「男がひとり」で

その終りの方に〃目の疎い　耳の悪い男がひとり　付いて行っこった〃は詩話会の時も今でも笑います。行っこったで、行ってしまったのですか武田さんは。

「二人の豊」

〃僕は「拾」の藍壷を前に　僕の生活を構成している〃に始まるこの詩は、青年期の武田さんを如実に見せますが、武田さんの詩には年令がないということも発見しました。

純と善と幼さが武田さんの詩を終始支えて来たのだ、と思いました。

〃どちらか一人の豊が　もう一人の豊の目玉へ　青いインキを塗っている　インキを目玉へ塗られている「豊」は　藍壷の主人に泣いて　腰にぶら下がっている藍壷を渡した——

——略——

その夜——目玉の青い「豊」が何だかいろいろ僕に話しかけたりして　僕は終いには煩さいと叱ってやると　目玉の青い豊が黙ってしまった　僕は叱り過ぎたと思って可哀そうになり　そっと僕は　目玉の青い「豊」を抱いてやった〃

「頭脳の中の黒い雪」（悲しき姪よ）

〃——略——

母も瞬時の一本樹かよ

吾も又瞬時の一本樹よ

泣くな姪よ切ない姪よ　汝の父とても

遠い処に今日も　一本樹でかあろうぞよ〃

帰郷して農業を手伝いながら、母を亡くし、父を満州へ送った幼い姪を見ながら、時代の嵐に倒されまいとする青年「豊」の気骨と、悲愴感が〃でかあろうぞよ〃という大時代的な表現にみなぎっています。

「晩秋の日に」

深い霧に包まれて

遠景が失われた時のように

視力の乏しいぼくは

丸い小さな島へ来ているようだ

川ぶちの

また丸い陽射しの枯草に

ぼくらは昼餉の位置をしめ

傍らの野菊で

手作りの弁当を開いていた

すると心や辺りまでが

急に冴え冴えして

なんだか僕らは別世界に

生れて来ているような気がする

そっとのり巻きずしを握りしめる

その上補聴器を離すと

ただ妻の丸い声だけの静かさ

つい今しがたの現実さえ

遠い時のことのようだ

妻が空を指さし

鳶が丸く舞うという

時どき陽に当たって　金色に見えるという

——略——〃

うすら明い円形の世界、妻の丸い声を静かに聞き、金色の鳶が丸く舞う、これはそのまま、天国の風景だと思いました。こんな、やわらかな風景の中におられたのだ、と感じ入りました。ひまひまに、詩集をひらき、お話をつづけたいと思います。

＜多賀町守野＞

〔昭和62年７月　広部宅にて〕

〔昭和61年11月　国民宿舎豊公荘にて〕

葬送

広部庄太郎

ひとり　またひとり
ことばをはぐくむ私の旅の
その途上で巡り逢った人々が
去っていく

うつりゆく季節のさなかで
見えなくなってしまった
星座のように
きらめくことばの数々が
消えていった

おお　元気か
おかみやん　大事にしてるか
武田のおっちゃんは
古本棚の横から
少し口もとをゆがめていた

人は
夜の深い河を泳ぐ
ひとつぶの泡のよう
ことばも
星々のあいだをさまよう
ひとつぶの泡のよう

そうして　一九八八年
十二月二十三日
おっちゃんの葬送を
ビデオカメラに収めると
車は静かに
人の心に余韻を残しながら
ひっそりと消えていった

私も一人の小さな詩人である
私は今日も
おっちゃんの店に来て
たゆむことのない
はかない泡のような
私の旅をつづけている

「晴着」に学ぶ

――武田　豊さんを偲んで――

関　谷　喜　与　嗣

詩は私の晴着
たった一枚の晴着

見てくれ
このボン　ボンした
もめんの生地を

わたしは詩をつくる心を「晴着」を通して
武田豊さんから学んだ

はじめて作った詩を持って伺ったとき
「なんべん書きなおしてきなあった――」
といって

奥から　広告の裏に
マジックで　赤　青　添削され
つなぎあわさった作品の巻物をとり出し

「鬼」の心を語られた

詩の鬼となり
鬼の心をみつめて
「もめんの生地」を大切にしてこられた
おっちゃん――

おっちゃん　おっちゃん――と
慕われながら
貧しさに耐え
出合った人と　親子　きょうだいのように
心をかよわせたおっちゃん――

視力がおとろえ
聴力が弱っても
「ようきとくれた――」と
だきかかえるように

「晴着」をみるのをたのしみに
しておられた　おっちゃん

小さい時分　打網の父に
兄と伴れられて
湖岸の夕やけ道を
赤々照らされながら帰って来た

父はとうに亡くなり
兄は引揚者で貧しく暮している
また　私も貧しい暮らしである

夕ぐれになると
自分の児供らを伴れて
社殿の小縁に腰かけて
鍛冶屋さんが炉から引き出して来た
焼金のような色を
恍惚と眺めていると
父や兄の想い出がいつも浮かんで来る
　この「夕やけ」の詩を

なんべんも　謡うようにきかしてくださった
わたしの恩師　武田豊さん

盆梅の季節になると
慶雲館の床の間に飾られている
堀口大学先生の詩の前に立って
わたしは「晴着」を想う

　ぼくも　ぼくの詩も
長浜の盆梅で　ありたい
年古りて　幹枯れ朽ちて
花凛と色に香に冴え

なくなられる二ヶ月前
悲運の武将　石田三成祭に参られた
おっちゃんは手を握りしめて
彼岸浄土に往生することを約束された身の
　よろこびをつげつつ
さようなら――　と
逝かれた

ともしび

田中正子

武田さんとの出会いは、私が二十才過ぎた頃であったと思う。ある夏の夕べ、井伊さんの歌集を読みたいと云う友人と共に、ラリルレロ書店を訪れた時だ。丁度中村さんも来ておられ、その時にはじめて長浜詩人会のテキストを頂いたのである。可愛らしい手造りのもので表紙には水彩画が添えてあったのを覚えている。それが機縁の入会であったと思う。また、四月頃に横山を越えて観音寺で詩話会をしたり、夏、浅井さんのお寺で合評会が行われたり、あの頃はみんな若かったし、とても楽しかった。何度かの詩展も催され、いつも武田さんを中心に熱気があふれていた。ずっと後になって近江詩人会に入会し、雪の日の駅の階段を武田さんを中心にいつじさんと御一緒したことや、春や夏の日の詩人学校出席の行き帰りの、その時、その時の思い出が尽きない。そして、長浜に出たとき、ラリルレロ書店へ寄ると、武田さんは、いつもあたたかく迎えて下さり、興にのると、特徴のある口調で、若い頃の自作の詩を口ずさまれ、いろいろの話につい時の立つのを忘れることが多かった。あわてて帰ろうとする私に、「田中さん、詩を忘れたらあかんで、体を大事にして無理せんようにな、車に気いつけて帰るんやで ………」と大きな両手で握手をして下さった。いま目を閉じると、あの武田さんの血色のよいお顔がありありと浮んで来る。そしてあのお声が耳底に甦ってくる。いつでもお会いできる気易さに甘えて却って御無沙汰ばかりで申訳なく、不意の訃報に接して取り返しのつかぬ思いに駆られた。

「詩を忘れたらあかんで！」武田さんのあのお声を、胸底深く私の尊いともしびとしたい。

武田先生を偲んで

百々清方

私の曾祖父の妹がびわ町安養寺の中村家へ嫁いでいた。明治の初期から亡くなる明治の終り頃の遠い遠い話です。私の父が、

「子供の頃、安養寺のおばがときどき勝手元でめしをかき込んでコソコソ帰って行く姿を終始その母があたたかく見守っていた情景を覚えている。」

とよく語っていた。そのおばには子が無かったので、その絶家を継いで下さったのが武田豊先生の先代だったらしい。昭和二十七、八年頃そのおばの五十年祭を勤修したからと云って、わざわざ私家へ赤飯を届けて下さったのが武田先生。お堅いことと今でも感銘を受けている。又、私の弟で東京でもの書きをしているのが、戦後県下唯一の文学団体「らくだ会」に入っていたが、その先輩に武田先生が居られた。私も大手通りのラリルレロへ古本漁りと立ち読みによく行ったが気恥かしく自分を名乗れなかった。それは先生の鏡のように澄んだ人柄に自分の醜心を写されるのが怖かったからのように思われる。

十年程前、中川逸司先生との出遇いから「真珠」に入れてもらい短い間だったが武田先生の人間に接して「あゝこんなあたたかい純な心を一生涯持ち続けた人は他にはない貴重な立派な方だ」と益々感心し通しだった。訃報に接したとき何か一番大事な人を失ったショックを覚えた。今も私の人生に出会った唯一の人と信じている。

まだまだ生きて欲しかったが …………。

合掌

誄句

行く春や惜しき人ほど先に逝く

アーケード抜けあたゝかなラリルレロ

昭和てふ時代を抱いて詩人逝き

幻庵清月

――武田先生――
どうぞ安らかに

肥田文子

雁渡る

木枯らしは
キーン　キーン　キン吹いているか
ドォー　ドォー　ドウ吹いているか
ヒュン　ヒュン　ヒュウ吹いているのか
月夜の町はずれの道で僕は妻に尋ねる
あんなにミカン水のように光っている小川は
チュウ　チュウ　チュ流れているのだろう
あそこに高いしゅろの樹は
バタ　バタ　バタ　バサ　バサ
そのどちらが鳴っているかまた妻に尋ねる
妻は考えてくれた
ヒュン　ヒュン　ヒウーと風は
ベロロ　ベロロ　ベロと小川は
バタ　バタ　バタとしゅろの樹は
僕はたたずむ　目を閉じて
すると今ある風景の裏側に
もう一つ黒い版画のように映る風景がある
それが真物のように判然として
耳の奥に残る遠い記憶の音を呼び戻す
ヒュン　ヒュ　ベロン　ベロン　バタ　バタ
妻も立ち止まった僕をふり向いて立ち止まっている
雁が渡る
それは妻が指さして言うのである
だが近視の僕の眼はそこまで届かぬ
なおこわれた僕の耳には

ササササササササササ
羽根を連ねて渡る羽音が聴こえない
雁渡る　それは妻が指さして言うのである
僕は妻を抱きよせてささやく
――木枯らしの月夜の道で――
聴きたい雁の声を――見たいその形象を

〝雁渡る〟先生のこの冬の作品が私は好きである。幾度も読み返させて頂いた。奥さんと月夜の道を歩かれた思い出のお姿をつぶさに見る思いがする。

私が武田先生と初めてお出合いしたのは、高校を卒業してしばらくの頃であった。先生はその時すでに眼と耳を病んでおられた。ラリルレロ書店の店先に坐っておられて、古本を借りに寄せていただく私達に、ユーモアに満ちたやさして応待をして下さった。本の好きだった私は、武田先生の「おっちゃんの店」へよく通った。一冊を読み終え、又違う本を借りて、友人と読みふけったのはこの頃である。

武田先生には長年にわたり、詩心というものも教えて頂いた。

「詩はいつも心を打たんとあかん。あんたの両親を大事にして、主人にも可愛がられ、愛情を示す嫁でありたい、そんな暮らしの中から、本当の詩は生まれてくるのや。」つまずくと、幼ない子どもの手を引いて先生のお宅をたずねた。ふる里を感じるような暖かなお人柄だった。

私はその時、先生の乏しい視力と弱まる聴力の苦悩の果てに生まれた、人間の真のやさしさだと思った。

「原稿は推敲を重ねて、広告紙の裏などに何度も何度も――線を入れ考え続けて、少しずつ仕上げていく、物を鋭く見る詩人の眼を持つことが必要だ。」

情の深い先生に振れさせてもらうと、心がなごみ、勇気が湧くのを感じた。

若い頃、公民館主催の詩の募集に、短い作品を応募したのがきっかけとなって、真珠の同人にも仲間入りさせてもらい、細々ながら詩を書き続けさせてもらっている。

眼も耳も深く患らいながら、詩作を続けられた武田先生の恩恵を忘れずに、がんばっていきたいと思っています。

詩人　武田豊さま

中居美津子

武田豊さま（私にはあまり遠い人なので、どうお呼びしたらいいのかわかりません。）

　今年の春、下の息子も私たちから離れて行きました。淋しいけれどもうかなしい詩などうたいません。長男が高校を卒業して我家を離れた時、淋しい気持ちを書いた詩を読んでくださって、

「息子が巣立って行くのがなんでかなしいんや、子供の成長をよろこばんとあかん。」と、ぼそっとおっしゃったことは、今でもわすれません。子供の頃から、あまり幸せでなく過ごされた方には贅沢な悩みとしか思われなかったのでしょうか、小さい頃、栄養不良のため目が悪くなられて、学校の黒板の字が読めなかったのは、字を知らないのではなくて、見えなかったのだと……。

　不自由なく暮してきた私には、その苦労もわからずに、子供が離れて行く淋しさばかり思っていたことがはずかしく思いました。

　ラリルレロ書店という古本屋があることは小さな頃から知っていましたが、武田さんとお会いしたのは真珠に入会した時が始めてで

「よおきてくれた。」

といって握手をもとめられ戸惑ってしまったことが、ついこの間のことのように思い出されます。

　同人の会合がもたれる度、まわりの人々の親切な手を借りて、とても楽しそうに出席されましたね。

　肥田さん宅での会合の後、小谷山へ登った時も、高年齢にもかかわらず気づかう私たちを見て、

「大丈夫や。」

と、気丈夫に登ってこられたり、亡くなられる年の夏には、広部さん宅で（私がお目にかかったのはこの日が最後でした）出された御馳走をいただきながら、楽しそうに詩の話などしていらっしゃった顔が目にうかびます。「寝ても、起きても、ええ詩を書こう、ええ詩を書こうと思てると、ええ詩は書けるんや。」と………。

　いつも聞くこの言葉をわすれずにいるのですが、なかなか、詩を書くことばかり考えていられないのが残念です。

　毎年ある長浜公民館の詩の発表会にも、作品の批評を不自由な耳と目で、いっしょうけんめい理解しようと勤めて下さいましたが、今年はお姿が見えなくて、もの足りなさを感じ心さびしく思いました。

　詩を通してだけの短かいおつきあいでしたが、私のわずかな作品の中に思い出となってそして、これからの詩作のかげの力となって生きつづけてくださることを信じています。

　さようなら

　武田豊さま

　心より御冥福をお祈りいたします。

武田先生のこと

脇坂恵子

　今から十年余り前、彦根の市民会館で滋賀文学祭が行われたことがありました。

　わたしはそこで始めて武田先生にお目にかかりました。ずい分お体がご不自由な様子で痛々しい感じを受けたのを覚えています。

　そこで先生のことを皆さんが、「おっちゃん」という呼び方で親しそうに話しておられたのがとても印象深く、はじめて参加したわたしは、ただ皆様のお話しされているのを聞いたり、様子をうかがったりしているだけでした。

　先生とはその後何年かして真珠の集りで二、三度ご一緒になりました。

　直接お話を伺うことはなかったのですが、独特の唄うような口調で、

　「よい詩を書こう
　　よい詩を書こう
　　と　いつも心に念じているのです」

と言われた言葉がいまも心に残っています。

　これは、詩を書くことだけでなく日頃の生活の中で折にふれて生き生きと心によみがえって、私にとってはとても大切な言葉になっています。

　先生のお元気なうちにお目にかかれた幸わせを思いながら、改めてこの言葉を大事にあたためなおしているこの頃です。

　ご冥福をお祈りします。

ボンボンの詩

高見　宏

　私は二十六才。一九七〇年、昭和四十五年三月二十七日（金）、大詩人武田豊氏は自宅のらりるれろ古本屋の奥まったところに坐っておられた。その前夜からその日にかけて、私は友三人と共に詩集を作り、合評会をした。友の一人のN君は長浜在で、「武田さんの家へ連れて行ってやろう」といい、出向いた。

　「詩というのは、高い山に登ると書くのでなくって、山に登ると書くのだ。」と言われ、「『古池やかわず飛び込む水の音』から何を感じたらいいのか。」と、おっちゃん（大詩人）は語りはじめた。「池はどこにあったろうか。晩春か初夏で夕方だろう。音からして蛙は蟇蛙であろう。はりつめた静寂の中でポチャンという音は我々を深い境地に入れてくれる。」おっちゃんはたたみかけるように短い言葉をあつい息づかいでならべ紡いでいかれた。

　おっちゃんは父母・妻・子をめでるよう、慈しむように一生懸命に説き、「詩のときだけでは困るの」と言い切られた。そのとき、おっちゃんは太マジックで、「指を憎む」という自著の扉に詩をかいて、献本して下された。その詩集の中に妻ということばがたびたび出てくる。そうして朝栄さん（年前の朝日新聞地方版のトップ記事に、タイトル＝不自由乗り越え詩集「指を憎む」人間の魂つづる作品＝武田さん家族らの励まし実る　とあり、記事中に奥さんの名がある）のやさしい人柄を思わせることばの響きに出あえるのである。そうして又、おっちゃんは、「指を憎む――戦争に行かなかったが、……故に指を憎むのだ」と話をおえられた。いないな、別れぎわに又、家族をめでるよう、慈しむようにいわれたのである。（日記より）

さて、おっちゃんの私へのことばは、

　詩はぼくの晴着
　たった一枚の晴着
　見てくれ
　このボンボンの
　生地を――

　　千九百七十年三月

　　　　　　武田　豊

　橘　善證　様

である。どんなに私は感激したことであろう。

　武田豊詩集の第五集「晴着」の中の一篇とすこしちがう。おっちゃんはなんと若いのだろう、若かったのだろう。謙虚でユーモアがある。詩ひとつを晴着とする詩魂の人でもある。「見てくれ／このボンボンの／生地を――」と。ボンボンとは「豊」その人のことである。「河だけは　ゆたァくん　ゆたァくん」（作品「河」より）と流れていたという。「豊」その人である。当時おっちゃんは六十歳丁度で、このうら若い私たちをみてますますご機嫌だったのかもしれない。元の詩は「見て呉れ／このボンボンした／もめんの生地を――」だからである。

　おっちゃんの詩には堀口大学の詩に似たところもある。さすが真弟子である。そのあと一、二回らりるれろ書店に寄っている私であるが、前を通るたびに、どうしようかと戸迷い、勇気を欠いてしまったのである。まことに惜しいことをしたものである。はやく時間をみつけてこの大詩人の詩集をゆっくり読んでみたいと思っている。三月二十七日は妙に夏だった気がしてならない。半袖だったような記憶がしてならない。ボンボン病にかかっていたのである。かれこそ二十年になる。

む

村　寿

確かに
枢の扉をとざし
もう出合えなくなることを
まぶたのうらで噛みしめ
両手を合わせてきたのだが
時々訪れてくれるのに恐縮している

おやじやおふくろの時もそうだったが
稼ぎは女房にわたしているよ
三食ちゃんと食ってるよとか
なにかと気をつかったものだが
おっちゃんは気らくで
肩がこらなくていい

日がさしているでもなく
きらびやかな照明あるのでもないのに
かぎりなく明るい広い部屋で
坐っているのでもなく
立っているのでもなく
ひたいのあたりをきらきらさせて
目のふちをぽおっと
花びら色にそめて
はじめての出合にときめき
母親のなかへかえったような
ずうっとずうっと向側の
流れを忘れた時間につつまれて
呼んでも話しかけてもくれない
あいさつなどしてくれたことがない

だのに
語りつくして言葉をうしなった時間の
里の祖母のひざでねむった時間の
においがして
いちめんのれんげ畑けを
ぶんぶんのように
羽音をたてて飛んでしまう

確かに
枢の扉はしっかり
とざして来たのに

天上花

大野せいあ

（昭和六十三年師走）
天上の六花（りっか）を摘みに発たれしか　せいあ

中日新聞の記者だった武田豊さんが、絵のような許婚者を伴なって黒銀行の東の家を折々のぞきに来ておられた。三和土ができ、五六段の棚が出来てようやく本屋の趣をもちはじめ、二十冊余りの漫画本が最初に店先に並んだのは昭和十五年だったか、さくらの花が盛りの頃だった。

毎日下校の途中に立ち寄っては少しずつ増えていく漫画本を一冊残らず読みつくしていった。

ラ・リ・ル・レ・ロ……風変わりだが、どこかメルヘンがあって、親しみをこめつつ店の出入りにその新しい看板を仰いだものだ。小学校三年生だった。

以後青年期まで立読みは続いたし、実兄が戦後いち早く武田さんに詩を学びB６判の「地上」という詩誌をガリ版刷りで出したりしていたので、知らぬうちに五十年近い殊遇をいただいたことになる。

俳句を作るようになってから、武田豊さんの火の玉のような詩魂に受ける影響は大きくなっていった。

「寝ても覚めても寝ても詩のことを忘れるな」
「詩は天地の重さ　詩はいのちの重さ」

実作者としての資質を常に自らに問うという姿勢を植え付けてくださった。この世で武田豊さんにめぐり逢うことのできた至福をつくづく思う。

印刷・装幀を任せていただいた第九作品集「長浜の灯」と全作品集「武田豊詩集」それに遺墨となったたった一枚の色紙。

美しい月夜
里の
　とある農家の裏道を通っていると
　テレビの音が流れ
大笑いする
家じゅうの人の声が聞こえた
今宵月夜
美しい月夜

どれも武田豊さんの濃いにおいがする。武田豊が変身の集冊と色紙。詩集の一行一句も、ちまちました色紙の文字もみんな武田豊だ。

天上の純白の六花を摘みに旅立たれて、いつかまた「居るかいな」「元気かいな」と、ひよっこり覗きに来てくれそうな気がする。杖を間違えたとひよっこり戻って来そうな気がする。

武田豊の詩情と私

中川逸司

兵隊で支那、今の中国の天津陸軍病院よりＬＳＴなる戦車上陸用船で佐世保へ復員して来たのは昭和二十一年三月であった。

長いと思った一年有余の歳月、黄土の大陸を歩き続けたあとの日本の山河の美しさは、栄養失調で痩せさらばえた眼に、言い得ぬ優しさを展げていたが、帰る沿線の駅や町の荒廃ぶり、殊に広島の光景は今も脳裏に焼きついている。この年は私は半病人のように家にいて、家事を手伝うのみであった。

当時、若い男女は食糧や就職難から私たちの村にも溢れていたが意気だけは盛んで、青年会活動も活潑で私も友からすすめられて、明くる年入会した途端、役員で次の年には、会長にさせられてしまったのである。

この村では保守の強固な地盤であったが、革新政党の代議士にも来て貰い立会演説会を開いて村の長老から叱責を受けたこともあり、十二月には東京軍事裁判で東條英機らＡ級戦犯に死刑などの判決があり、私は今まで受けてきた教育やいろいろのことが信をおけない心になっていたのである。

そんな頃、長浜の古本屋（三〜四軒あり）を渡り歩いたが、ラリルレロ書店の武田豊を知った。詩人とは知らず、まして詩などは何一つ知らなかったのであるが、私にとって人間の情ほどこの上ない宝物に見えたのである。

そこには武田豊の暖かい人間味、飾り気のない素朴があった。それ以来、店先で話を聞き、詩の魅力に取り付かれてしまったのである。

昭和二十五年八月近江詩人会ができ、私もその最初から入会、戦前からの抒情味溢れる指導者、井上多喜三郎・田中克己・小林英俊・鈴木寅蔵氏等から衒のないお話を得られることになった。又、武田豊宅で岩佐東一郎・田中冬二氏など高名な詩人たちと夕食を共にさせて頂き、多くの友を知り、遅い私の青春があり詩作を続けることができたのであった。

私の詩への執着は、武田豊の詩情であり、近江詩人会の先達の方たちの抒情であった。

戦後の初の詩集「晴着」にある魅力である。おっちゃん自身は、これは落ちこんでいた時の作だから駄目だとよく言われたが、私のみでなく多くの人が、この晴着の詩情を愛しているのである。詩は所詮、個のものであり、情のものなのであろう。

武田豊おっちゃんを知って四十年、私が詩を書いてきて四十年、生涯田舎暮らしの運命を背負う土着性が、二重に親近さを増したというべきかも知れない。

遠く離れれば離れるほど思いが深くなるという肉親のように、おっちゃんはもう居ないと知りながら、長浜へ行くと、つい足が大手のラリルレロへ向いてしまうのである。

そこにはよき理解者であった奥さんが、ひっそり店番を、留守番のように居られて、私はまだ救いがあると思うこの頃である。

そしてまだ詩を続けられそうであると思うこの頃である。

あとがき

少年老い易く学成り難し一寸の光蔭軽んずべからず、学校で習ったこの漢詩が、あるときは後悔の念で、あるときは元気づけのようにいつもあったのですが、それと同じ意味でおっちゃんの「晴着」の中の未完の詩の一節の、この尻尾は絶対放したらあかんでえと、おっちゃんからよく言われたものです。

諸行無常とか色即是空とか月日は百代の過客とか水の上に浮かぶうたかたとか、ほんとに淋しい名文句が思い出されて、おっちゃんを亡くして尚その思いを深くしております。

追悼号を編むといっても、どうせ小さなグループのこと、極く内輪のものなので記念すべきこともできませんが、おっちゃんの霊前に供えて合掌する意味で御諒承お願いしたいと思います。

深い縁の近江詩人会でも追悼号を編まれる旨ですので重複を避け会長の藤野一雄兄、県内より谷川文子さん、県外より三和愛子さん、鬼の仲間でたびたびラリルレロを訪われた山田博兄に詩文を御願い致しました。又、地元より旧いおつき合いの川崎時男さんにもお願いしておりましたがお体悪い由で、後日機会を得たいと思っています。

また、いつも本誌の印刷を御世話になって居ります長浜ぷりんとの大野せいあ氏にも、原稿御願いしました。氏は俳人で花雁句会を主宰しおっちゃんとは旧知の方です。

おっちゃんの良き詩友の方々は大方故人となられ詩文をお願いする術もありません。

もう間もなく梅雨期に入ります。歳月人を待たずの如く、この特集も大変おくれましたが、無事発行の運びになりました。

せめて貧しい詩ながら自分の詩を探して、尻尾を捉え放さないことが、おっちゃんへの何よりの供養としてのみ思います。

五月下旬　中川逸司

真珠　第五十七号

平成元年七月五日・印刷
平成元年七月十日・発行（非売品）

編集兼発行者　中川逸司

発行所　〒526 長浜市元浜町一二―二六
真珠グループ